第五十回中央教化研究会議　基調講演

アジア世界から見た戦後の仏教の特色と未来

蓑輪顕量

司会　それでは、蓑輪先生に、「アジア世界から見た戦後の仏教の特色と未来」と題しまして、ご講演いただきます。先生、どうぞよろしくお願いいたします。

蓑輪　それでは、早速、話をさせていただきます。「仏身論を考える手がかりに」と言って、戦後と書いてありますが、戦前から、といっても大分古く、歴史的なところを含めて、仏陀論、仏身論、教主論、それから中国天台、智顗の三身説、日本天台の仏身論、それから、中世の仏身論等に触れて、アジア世界に入って、現代の台湾仏教、中国等の話をして、戦後の仏教の特色というような感じでいきたいと思っています。

まず、仏陀論、「仏身論と教主論」というように書きましたが、仏教学の中で大事な領域の一つになるかと思います。ここで中国や日本天台における典型的な理解を見ておきたいと思います。中国天台等では、法、応、化、すなわち法身と応身と化身が出てきます。中心は応身で、この場合は報身と同じと理解していただきたいと思います。いわゆる三身説です。そして、「三身は一体である」というものの見方が主流になっていきます。それから、中国の唐代において登場してきます密教に見る四身説というのがありますが、これは、自性身、受用身、変化身、等流身です。

いわゆる自性身は法身に当たります。受用身がいわゆる報身に当たって、変化身が化身に当たります。そして、等流身というのは、さまざまに変化して衆生を救済するものです。

それから、もう一つ、密教の方で重要な考え方として登場してきますのは「毘盧遮那遍一切処」という記述に基づいて、仏がこの世界に遍満しているという考え方です。あともう一つ、密教の中で重要なのは、空海さんが言ってしまった「法身が法を説く」という考え方です。後の真言宗の中にはずっと大きな問題として存在し続けていきました。伝統的な教理では、法身は教えを説かないとされ、理的なものでした。その理的なものであるはずの法身がいかにして法を説くのかというのが、後代への大きな関心事になりました。それを解決するのが、いわゆる新義真言宗、現在の智山派や豊山派の方で主張するようになります、加持身説法説というものです。このように、いろいろな仏身の考え方があるのですけれども、日蓮聖人と関係の深い三身一体説というものを少し見ておきたいと思います。

三身一体説というのは、実は意外に早くから、様々な大乗経典等に出てきます。例えば、『入楞伽経』の中には「応化仏は、法身仏の法仏と、報身の報仏如来と異ならず。また一にあらず」というような記述が出てきたり、『不空羂索神變眞言経』の中には「これらの諸仏等は、種々の仏説一切如来の三身一体をあらわさんがために、皆等しく、毘盧遮那、仏身相好と云々」というような記述が出てきまして、「三身は一体である」という考え方が出てまいります。これは、天台の中でも同じように述べられていて、先に四明知礼を出してしまいましたが、「三身一体の仏を見ない、あるいは円頓之法を聞かないというのは、これは間違ったことだ」というような言い方が出てまいります。

もとに戻りますけれども、中国の天台大師智顗の場合には、別教の中で考える説と、円教の中で考える説と、二つの見方が出てまいります。そして、別教で考えていくと、三身、法、報、それから応、応は化と言っていると思いますが、これは格別であるとされます。円教の場合には、「三身が円融するんだ」というように言っていて、その三身円融の中でも中心は、報身仏に置かれました。「通じて三身を明かさば、まさに報身にあり。」という言い方をしてい

まして、具体的な徳を備えて、「因に応じて仏になった仏さん」というのが、一番大事なのだと言います。これは先ほど庵谷先生のおっしゃっていたところだと思います。寿量品の久成の仏が、三世にわたって衆生を救済するところの知恵を譲る点とか、衆生の修行と成仏の手本としての因行果徳を備えているという点で、天台大師は報身をとても大事にします。それが、報身が法身の理に合致するので報身でも常住だと見たと考えていいのだと思います。

日本天台におきましても、この三身一体説は受容されています。最澄さん以降に出てきておりまして、報身、法身、化身の一体説が言及されます。円珍の書いた『授決集』の中に「三身仏の決」というのが出てきまして、ここでも先ほど引用としました『不空羂索神変真言経』の第二十八を引いていますけども、「一切如来が三身一体なり」と出てきます。「皆、毘盧遮那、法身、相好と等し」ともあります。「經文既に曰く、三身一体、皆、遮那の相好と等し。何ぞ、三身格別の言をもちうべけんや」という、このような記述が出てきていまして、日本天台宗の初期のときに、やはり中国の天台の影響を受けていると考えていいと思います。とにかく三身は一体であると捉えています。三身が一体であるということは何を意味するかといいますと、今日の最初の話の中で鈴木先生が強調されましたように、「永遠なる仏を具体的な形を持った化身のその奥に見ている」ということなのだと思います。

少し時代が飛んでしまいますけれども、中世の時代の円爾弁円という方が伝える、資料の中に見られる興味深い一節がありますので、それを少しお話ししたいと思います。その資料は、『十宗要道記』というものです。この資料は、実は原典資料が失われてしまっておりまして、写本でしか伝わっていません。日蓮宗的な言い方をすれば、写本遺文のようなものだと思いますが、その中に、十宗について述べている箇所が出てまいります。その十宗の中の一つに「華厳は天台宗に同じ」というところが出てきまして、そこに仏の捉え方についての議論が登場します。「今、この宗は、三祇を経ず、薩埵の行を満ぜず、一念を超えず、遮那の果をなし、色相荘厳の佛を選び、一心三観を修習し、解には即身成仏の理多く、證は一体三身の仏を得るなり」と、こういう言い方をしていまして、「一体三身の仏」とい

うものが出てきます。

それから、「色相荘厳の仏」という言い方も出てきます。色相というのは、目に見えるさまざまなものですので、それによって飾られている仏を見ることができるのだと、言っています。それもですね、「三祇を経ず、薩埵の行を満ず」とも言っています。また、「長い時間をかけなくても菩提薩埵の行を成満し、一念を超えなくても遮那の果を證するのだ」というようにも言っていますから、非常に本覚的なにおいがします。けれども、このような表現のところから、時の天台宗が、実際に目に見える仏さんは、恐らくこれは化身仏なのでしょうけれども、色相荘厳の仏を選んでいて、しかし、その奥に一体三身の仏、法身と報身と化身が三つ重なって見える、というような、そのような理解の仕方をしていたようです。

その次の記述も、一体三身をあらわしているのだろうと思います。最初に「知るべし」というように書かれていまして、下線を引いたところですが、「一体三体、本寂本明、三身一体、法身如来」とあります。「今、この理を明かすに、本覚の仏に一致し、身土不二、寂光土に居す也」とあります。「本覚の仏」というような表現の仕方は、まさに中世の時代に盛んになっていきました本覚思想の影響を感じさせられます。そういう本覚の仏に帰して、「身土不二、寂光土に居るのだ」というふうな言い方が出て、しかし、その前のところで、「一体三体」、あるいは「三身一体」という言葉を使っています。このような点から考えますと、当時の、これは華厳宗と天台宗の中でとられている考え方になるわけですが、その特徴は「三身を一体のものとして見る」というところにあったのだと思われます。

これに対して、日蓮聖人の仏身論、これは先ほど庵谷先生が詳しくお話されましたので、私のものは補足的に聞いていただければと思います。「寿量品にいわく、然るに、われ、実に成仏してよりこのかた無量無邊百千萬億那由佗劫となり」と出てきますね。「五百塵点乃至、顕すところの三身は無始の古仏なり」というように、このような言い方をしておられます。この「無始の古仏」というのは、日蓮聖人の『観心本尊抄』の中に出てきます。「古仏」とい

う言い方は、実は何度か登場してきます。『聖愚問答抄』の中にも、「深谷に開敷せる花も中道実相の色を顕はし、広い野に綻ぶる梅も界の三千の薫りを添う。言語道断・心行処滅せり。謂ひつべし、商山の四皓の所居とも又知らず古仏経行の迹なるか。」と。こういうように言っていますので、三身一体の仏さんを指しているときに、「無始の古仏」とか、「古仏」という言い方を、日蓮聖人は使っていらっしゃるようです。そして、本仏という用例はないわけではないのですけども、たとえば、「今、末法に入れば最も仏の金言の如きんば造るべき時なれば、本仏本脇士造り奉るべき時なり」というような言い方で出てきています。ですから、「本仏」という言い方も、何度かは使われています。しかし、「本仏」という言葉を使ったときに、一般には、対比される言葉は、実は「化仏」という言い方の方なのです。皆さん、如来さんの、特に十一面観音さんを想像していただければ結構なのですけれども、あのときに、本仏というと本体のところの仏が本仏で、化仏というのは頭の上に乗っかっている、さまざまな尊格のことが「化仏」です。ですから、「本仏」というのは「化仏」という言葉と対比して使われるのが実は一般的です。これに代わって、「本仏」、「迹仏」というような言い方が使われるようになってくるのは、やはり、ある時代以降のことではないかと思われます。

さて、「古仏」という言葉の起源はどこにあるのか、ということに少し興味を持ちましたので、調べました。どこにあるかといいますと、何と、『華厳経』とか真言系の『大日経』にあらわれる言葉でした。ちなみに、『華厳経』と『大日経』というのは両方とも、教主になっておりますのが毘盧遮那仏ですので、その関係からも、近しいところにあると言われています。その『大方広仏華厳経』の中に、仏さんの名前がたくさん出てくるところがあるのですけども、そこに、「無上王仏、希有身仏、梵供養仏、不瞬仏、順先古仏、最上業仏、云々」というような感じで、よくこんなにたくさん、仏さんの名前を考えているなと思うぐらい、仏の名前が出るところなのですけれども、そこに「古仏」という名称が登場いたします。同じように『大日経』の中にも、世間成就品第五ですけれども、「無垢妙浄清

圓鏡常現前　如是眞實心　古仏所演説」と、こういう言い方がされておりまして、「古仏」という言い方は、どうも真言系、あるいは華厳経系の中から登場してきているようです。

実際に真言系の中で当時、どういう考え方があったのかということを少し見てみようと思います。見ましたところ、実は院政期のころから、覚鑁という、これは真言宗の教えの中に浄土教を取り込んだ人として有名な方です。その後を継ぐような方として、道範という方が出まして、この道範さんは十三世紀の初頭ぐらいに活躍し、次の頼瑜という方は、日蓮聖人よりも少し遅れるぐらいの方ですけども、大きく真言宗を展開させた人です。道範、頼瑜、特に頼瑜という方が、「新義真言宗の祖」と言われ、真言宗の中でよく使われる四つの仏身の考え方の中の、一番初めの自性身のところに「本地身と加持身というのがある」ということを言い始めまして、加持身が説法をするという新しい加持身説法説を主張いたします。それ以前の東寺とか高野山金剛峯寺を中心といたします古義派の真言宗の中では、自性身のみが本地身であって、それ以外の、受用身、変化身、等流身の三つは加持身であると捉えていました。ですから、自性身が本地身で、これが法身だということになります。この法身が説法をするというのは、伝統的な教理からしても、説明がしにくいところがあります。ところが、頼瑜さんは、「自性身の中に実は本地身と加持身がある」と新しく位置づけまして、その自性身の中の加持身が、実は力を持っている、と少し変な言い方かもしれませんけれども、その加持身が法を説くことができるのだと新たな位置づけをします。この加持身説法説というのは、真言宗の中では大きな重要なテーマなのですけれども、日蓮聖人ご自身は、あんまりこれについては言及をしていないような感じがいたします。

そこで、少し全体的な流れを考えてみれば、天台系の中に流れていた法身、報身、化身、及び三身一体説みたいなものが、幾つもの流れを作っていくように思われます。それからもう一つは、真言密教の方の自性身、受用身、変化身、等流身の四身説が一つの流れを作っているようです。この四つの流れは、実は南都系の方にも結構あります。三

身一体説の影響というのがどのようなところに出てくるのかというと、化身である釈尊も、法身である釈尊も、色形をもって表現することができるとするところです。法身は本来、法そのものであり、真理、真如と同じであるとすれば、実は形をもって表現することはできません。ところが、三身一体説の立場に立てば、色形をもって仏をあらわすことができることになります。日蓮聖人の三身一体説というのも、「実は、報身、化身の釈尊も無始無終になるところにその特徴がある」と言われます。これは一代五時図に見る三身説の中で、天台宗のご本尊は久遠実成実修実証の仏で、それは釈迦如来であって、華厳経が説いている盧舎那仏や真言の大日等は、「皆この仏の眷属なり」という言い方をするのですが、日蓮聖人の見ている三身説というのは、始成の三身と久成の三身とに分けられています。そして、始成の三身の中では、応身、報身というのは、始まりがあって、終わりがあるか終わりがないかの違いでありますけれども、応身は有始有終、報身は有始無終、法身は無始無終であるとされます。ところが、久成の三身は、応身も無始無終、報身も無始無終、法身も無始無終であると、このように見ています。ですから、寿量品の中で初めて久遠実成が説かれることによって、そこから解釈を作り上げていくのだと思うのですけれども、この肉身を持ったお釈迦さんも無始無終であり、因行果徳の仏さんも無始無終になるというところに大きなポイントが置かれているようです。そうして、永遠なる仏陀というのが、基本的に、日蓮聖人の言葉では「古仏」というような言い方で表現されるように、多分なっているのではないかと思われます。ここまでが、歴史的な観点から見たところです。

そして、この後は、実はアジア世界に見る三身説、台湾の仏教というような感じで、三身説だけではなくて少し幅広くお話をさせていただきたいと思っています。今、台湾というのは、大変に仏教の盛んな国だというように言われています。さて、多くの人たちが、つぎのようなことを言います。世界の中で、お坊さんが尊敬されている国が、この地球上に二つある。その一つはタイランド、もう一つが台湾である、と。

その台湾の仏教は、詳しいことは、古い時代のことはよくわかっていないところがあります。明末清初の混乱のと

きに、明朝の復興を願った鄭成功という方が台湾を拠点にして活躍をします。その鄭成功さんが台湾を本拠とした十七世紀ぐらいから、台湾の歴史は、多くの人々に知られるようになってきました。それ以前の歴史もちゃんとあるのですが、皆さんがよく知っているところは、多分、鄭成功が拠点とした台湾、それ以降の歴史であるような気がいたします。元々、大陸から近いのが台湾です。台湾はすぐ西側の方に大陸を控えています。一番近いのが福建省です。ですので、福建とか、福建の少し上の浙江とか、それらの地域の影響を受けた仏教が入ってきて、それが広まったと考えられています。この仏教に大きな変革が起こるのが一八九五年ぐらいからです。何があった年かといいますと、これは日清戦争があって、台湾が日本に割譲された年です。それ以降、しばらくの間、一九四五年までの間、日本が宗主国として支配する国になります。大体、台湾の仏教を考えるときには、その一八九五年の前と、日本が支配していた時代と、そして戦後の解放された時代と、三つぐらいに区分されることが多いようです。

特に現代に活躍する仏教は、戦後に登場いたします。現代を代表する五つの本山というのが存在しておりまして、それが、佛光山、法鼓山、中台禅寺、霊鷲山、それから括弧に入れましたが、慈済功徳会です。この中で一番初めに大きな集団を作りますのは、実は佛光山です。どこに拠点があるかといいますと、台湾の高雄に拠点があります。現在、この佛光山に仏陀記念館というのができているのですけれども、これが本当にびっくりするぐらい巨大な施設です。

そのような台湾仏教の背景として何があったのかと考えていきますと、実は、清朝の末期に登場いたしました中国仏教の改革者、太虚という方の影響がかなり見てとれます。この太虚という方は、人生仏教というものを主張いたします。「鬼神（人間の霊魂などに仕える仏教などではなく）人間を生かす仏教でなければならない」ということを主張いたしまして、清朝の末期に仏教界の改革運動を起こしていきます。それが大陸で成功したのかどうかということは、評価が分かれるところなのですけれども、実はその影響下に活躍する方が台湾に出てまいります。この方、印順

法師という方です。印順さんは実は大陸に生まれた方なのですけれども、二〇〇五年に亡くなっていらっしゃるのですが、大陸で仏教の修学を続けながら、太虚の人生仏教に影響を受けまして、新しいスローガンも提示していきます。『阿含経典』からその発想を得たと言われていますが、仏陀は肉身を持ち、人々の間で教えを説いた、何を大事にしているかというと、三身一体と見てはいると思うのですけれども、「現実の世の中にあらわれた、肉身を持った仏陀」ということを大事にしているところがあります。

印順法師が主張いたしましたものが、人生仏教とは少し違うと捉えられることが多くなってきましたが、それは「人間仏教」という名前で呼ばれます。太虚の人生仏教を継承して人間仏教を主張したと。それは何かというと「人々の間で活躍する仏教でなければばならない」ということでした。この印順法師の影響下に、今、とても元気のいい佛光山の星雲法師とか、法鼓山の聖厳法師、この聖厳法師という方は、日蓮宗ともご縁のある方でありました。聖厳さんは、台湾のお坊さんで初めて日本の大学で学位を取られた方です。学位をどこで取ったかというと、立正大学です。それから、証拠の証を書く証厳法師が始めたところが慈済功徳会でありまして、この慈済功徳会は、出家者の集団としては小さいのですけれども、在家の方たちの集団としては巨大です。在家の中に委員という方が作られておりまして、その委員を支えるためのサポーターみたいな方が全世界に約四百万人いると言われています。証厳さんの組織というのは非常におもしろいものです。在家の方たちの中で、菩薩行として位置づけられているのですけれども、社会のために尽くしたいという人がいらっしゃったとしたら、その発心を大事にいたしまして、その方たちを受け入れるのですけれども、まず、その方の友人とかいろいろな人たちにお願いをして、四十人のサポーターを作ってくださいと指導されます。その四十人のサポーターの方が、毎月一定の金額を、その菩薩行を実践して社会のために尽くしたいとしている人たちを支えることになる制度を作りました。その社会活動をする人たちのことが「委員」という名前で呼ばれているのです。慈済功徳会には、その委員の方々が約二万人いらっしゃいます。それを支えるサポーターの人たちが、

公称ですけども、全世界で約四百万人いると言っています。東日本大震災のときにも支援が東北地方に入りましたし、しばらく前のスマトラ沖大地震のときにもいち早く、この慈済功徳会の人たちが支援に入っています。そういう組織を作り出した証厳さんなのですけれども、星雲さん、証厳さん、もう一人の聖厳さんも、印順法師の影響下で育ったと考えられています。

では、その印順さんの思想の特徴は一体どこにあったのでしょうか。現代社会においては、「理性や知識が重要である」との認識のもとに、仏教の理知の部分を重視したとも言われています。それ以外にどういう点を大事にしたかというと、原始仏教の純粋さ、大乗仏教初期の実践と思想、大乗仏教後期の唯識と如来蔵などを大事にし、後代の仏教においては、それらが有意義になるものと考えていたことが指摘されています。一九八九年に印順さんが書きました『契理契機之人間仏教』、『華雨集』という資料集の中に入っているのですけれども、その中に『増壹阿含経』の所説である「天上ではなくて仏になったのだ」という記述を重視したことが出てきます。「仏たちは人々の間に出でて、人々の間に登場して、決して天上において仏になったのではない」という記述を重視され、「仏は人々の間にある」ということを大事にし、かつ、「人々が一番のもとなのだ」ということを主張いたしました。この二つが印順法師の人間仏教の理論になり、その基本は実は阿含経典の中から導き出されました。

同じように一九八三年、少し前ですけども、『雑阿含経論会編』というのを書いております。その三巻の中に、雑阿含、相應阿含についての議論を少し書いているところがあります。雑阿含経は、釈尊の在世中の仏法の形態を伝えており、「仏法が簡略に、しかも偏ることなく説かれ、修行を中心とし、世間によって世間を悟り、出世間の理想である涅槃を実現している」と捉えました。しかも、これが仏法の根源であり、大乗の中観や瑜伽の深い意味も、全て、この雑阿含経から流れ出たものであり、雑阿含経の中に大乗の淵源があるというように位置づけていきました。このように、印順さんは雑阿含経を重視しているところがあるのですけども、この意識が人間仏教の中に表出していきま

す。『人間仏教要略』という本が、二〇〇一年に刊行されました『人間仏教論旨』というものに収載されています。『人間仏教要略』においては、法と律との合一、縁起と空との統一、自利と利他との合一、この三つが、人間仏教の中で一番大切だと印順さんは主張されています。それらを具体的な形で実践しようとしていったところが、その成功例の一つだと思いますけれども、それが実は佛光山です。

この佛光山というのは、現在、台湾の高雄の近くに拠点があります。今、日本にも拠点を持ってきておりまして、山梨県身延町の本栖湖湖畔の本栖寺。これは、もとは日本のある企業が持っていたところなのですけども、これを佛光山の方に譲られまして、そこが本栖寺になっています。それから、東京の池袋の近くですけども、東京佛光山寺というのがあります。さらには、びっくりするくらい大きいのですが、群馬県の伊香保温泉に、法水寺という寺院を作っています。これは今年の四月に行って撮ってきた写真なのですけれども、車の大きさと比較してわかると思うのですが、日本に中国式の、台湾式と言った方がいいのかもしれませんが、台湾式の巨大寺院が出現しつつあります。これは伊香保温泉へのお客さんが激減しているというのが背景にあったという話ですが、台湾の仏教者の人たちが社会活動にも頑張っているのを見て、行政の方の理解が得られたようであります。

この人間仏教のスローガンは、文化による仏法の孝養、教育による人材の育成、慈善による社会への奉仕、共修（キョウシュウ）、呉音読みをすれば共修（グシュ）ですが、共修（キョウシュウ）と読んでおきます、共修による人心の浄化ということを主張しています。つまり、私たちの物の考え方に文化というのは大きな影響を与えていますけれども、その文化（実際に文化と言っているものは、私たちの生活習慣みたいなものを全て含めた総体的なものだと思いますが、例えば、お茶だとかお花だとかあるいは何かを学習するとか、そういうものも文化の一つと言えると思うのですが）、そういう活動を通じて世の人々に仏様の教えを伝えていこうとしています。それから、教育による人材の育成ですが、佛光山は教育にも力を入れていて、小・中・高・大学とつながっていく教育システムとは別の、専

門学校的なものである佛学院を持っていて、次の世代の教育に力を入れています。それから、慈善による社会への奉仕で、さまざまな慈善活動を行っています。あと、共修（キョウシュウ）と読みましたけれど、一緒にやることで、人心の浄化をしようということを主張しています。

もう一つ、人間仏教の代表的な例として挙げられるものは法鼓山です。これは聖厳法師という方が始められたところです。写真に写っておりますのは、現在の拠点になります、台北から東の方に行きまして、基隆という町があるのですけど、その基隆から少し北に上がったところに、金山郷という地があり、そこに大きな拠点ができています。ここに大学が設置されまして、大学の中でも、総合大学を目指しているようです。先ほども言いましたが、立正大学で初めて学位を取得した台湾のお坊様です。人間仏教の中でも、学術の方に関心を持っておりまして、かつ、修行道をしっかり意識しているというので評判を得ています。

もう一つ、人間仏教の影響とは直接には言えないかもしれませんけれども、おもしろい寺院も存在しています。これが実は、びっくりするぐらいの巨大な寺院を、台中から少し東の方に入りました埔里という町に作っています。このお方も実は中国四川省の出身で、蒋介石とともに台湾に来台しています。台湾の現在の仏教は、国共内戦で将来の中国に希望が持てなくなったお坊様たちが台湾に渡りまして、それらお坊さんたちが拠点を作っていくというような感じで、戦後、発展しています。この中台禅寺の惟覚和尚という方、もう亡くなっていらっしゃいますけれども、禅を中心に教宣を拡大しました。一九九〇年代に大量の大学生を出家させ、社会的に批判される事件が起きていました。巨大な寺院を台湾中央部の埔里に築きまして、天台の中道実相観や、発語の最初の部分を観察するという、清朝以来の話頭禅を広めています。この話頭禅というのも気をつけるべきものです。臨済宗の中で話頭禅というと、本来は、「狗子に仏性有りや、無し」とか、「仏とは何か、麻三斤」みたいな、ちょっとわけのわからない問題を心の中に抱き続けていって、心を一つの対象に結びつけていくところに、文章を使うというのが、この話頭禅

の本来の用法だと思いますが、清朝のある時期から、この話頭禅が、私たちの心の中に、何か物を言おうとしたときとか、発語しようとしたときに最初に生じてくる心の揺らぎみたいなものがあって、その最初のところをつかまえる禅があるのだということを主張して、それを話頭禅と言っています。惟覚和尚は、これを主張したことが確認できる一人として、少し注目できる人です。

この中台禅寺は、瞑想に秀でるという評判を得まして、多くの信者さんたちを獲得していきます。たくさんの方が出家して、お坊さんになりました。ここは、法身、報身、化身の三身説を受容しているのですが、非常に興味深いのが、化身の釈尊、報身の釈尊、法身の釈尊を石像に作ってしまったことです。これは三身の各別の感覚だと思うのです。正面に三体仏が並んでいますが、これは過去と現在と未来の仏さんです。一番端っこにあるのが、これは中台禅寺の全景です。ちょっと茶色っぽい小さな、後ろに円光が見えているところは、これは化身仏だと思いました。そして興味深いのは法身仏で、それが白っぽい感じの、右上にある小さなやつです。化身仏と報身仏は、結構はっきりとわかるような形で作られているのですが、法身の釈尊さんは、建物の一番上に安置されているのですけども、そこの部屋は白の大理石で作られていて、法身仏も白の大理石で作られていました。ですから、目に見えないというようなことを暗示しながら法身仏を作っているという、非常におもしろいところです。

三身が一体であるという思想が、どうも背景にあるようですが、それを図像にあらわすものが存在していて、化身の背後に報身や法身を見る伝統というのが存在し、三身一体説とか三身円融相即説として出てきます。こういう考え方から見ていけば、本仏という言い方も、元々は三身を統合した、元々の仏というぐらいのニュアンスで理解していいのではないかと思うところもあります。翻って、日蓮聖人に戻れば、「化身も報身も寿量品の久遠に実成した」の記述に基づいて、無始無終と見て、それが元々の仏であり、「古仏」と表現された、と最初の方で言ってしまいましたが、そのように見ていいのではないかなと思います。

そして、未来へ向けてということに関してなんですけども、東アジア世界の中国、台湾、韓国等において、過去仏、現在仏、未来仏という考え方が、結構踏襲されています。本堂の中に三体の仏さんが安置されるのがよく見られます。時間の永遠性みたいなものを過去と現在と未来というように見て、そこに一貫している仏さんというのを考えています。それから、一体で見たときにも、肉身の背後に、報身や法身を見るという、そういう伝統も存在しています。言説の上で、三身という考え方が成立したが故に、その融合を説くということが起きたというように考えていいのだと思います。

それから、人間仏教に関してですけれども、この人間仏教は、十九世紀の末ぐらいから起きてきたと、今、一般に言われていますけれども、少し日本の仏教の歴史にさかのぼってみますと、元々、そのような意識が、日本にはあるのではないかという気がいたします。戦国時代に、日本の仏教は大きな変革をこうむったとよく言われます。どういうことであったかといいますと、中世の時代までは、公家と武家と、それから寺社家というのですけれど、この三つがそれぞれ、権力を持った存在として鼎立していました。これが戦国時代を境にして、寺社家は武家の支配下に入っていきます。この時代以降、仏教は政治権力のもとに活動するようになっていきます。戦国時代を経た後の近世の仏教は、どういうことを特徴としたかといいますと、「社会にとって有用な何かを提供する」ということを結構大事にするようになっていきます。

近世の初頭では何が起きたかといいますと、実は意外にも戒律の復興が起きています。法華宗の中では、深草元政上人の法華律がありますし、ちょっと時代が下りますけれども、慈雲大師飲光の正法律とか、それから、それ以前の、最初のところに天台の安楽律なんていうのもあります。そういう戒律の復興みたいなものが何をもたらしたかというと、「民衆の自律精神に寄与した」と言われています。それ以外にも、さまざまな、勉強のための資料集が作られまして、例えば、『道歌集』、道の歌を集めたものが作られました。あるいは仮名法語というものがたくさん作られて、

そうして、実は民衆の考え方に大きな影響を与えていく存在となりました。つまり、人々の中で有用であるという観点が、かなり濃厚に出ていくのが日本の江戸時代以降の仏教ではないかと思います。これが、近代の時代になりますと、仏教界は初めて政治の世界から切り離されます。そして逆に、自ら社会にとって有用であることを示そうとして、行き過ぎて、政治の要求と合致する活動になって、いわゆる戦争協力という問題を起こします。

一方、台湾の仏教の方の隆盛の背景を考えていきますと、仏七と呼ばれる念仏を一週間、あるいは禅七と呼ばれる座禅を一週間行う修行というのがよく行われておりまして、体験的な部分が、かなり正面に出ています。それから、さまざまな啓蒙活動を積極的に行っているところが認められます。文化活動、経典の読書会などです。これも少し不思議に思うのですけれども、今、日本で仏教者の方たちが、一般の在家の方たちを招いて、仏教の勉強をしましょうというときに、経典の修学を正面に出すということは、あんまり多くないような気がします。もっとも、日蓮宗では『法華経』を皆さんと一緒に読みましょうと勧めていると思いますが、それ以外のところでは意外に少ないような気がするのです。ところが、台湾の仏教ですと、在家の方たちと一緒に勉強をしようというときに、経典を読むとか論典を読むということが当然のようです。びっくりしましたのは『大智度論』を、信者さんと一緒に三年か四年かけて読み通して、そのときの講義の記録が本になって出たりしていたことです。ですから、経論を修学することによって仏教を一般の人にきちんと理解してもらおうとしているところが興味深く思われました。

そして布教活動が非常に積極的です。仏教界がテレビ局を、今、五つ持っています。どこでも、いつでも、チャンネルを回せば法師の説法が聞ける。これは日本は放送法の問題でできないのですけども、そういう布教活動が盛んです。ですから、僧侶自身の工夫が多く見られるところがあります。非常におもしろいなと思いましたものに、実際の道徳的、倫理的に良いことだけを集めた地域新聞を発行しているところがありました。今、私たちが目にする新聞は、世の中の悪いことばっかり報道してくれますけれども、よいことだけを集めて新聞を作って、これが行政の人たちの

目にとまって、社会の中で必要なものというように認められて、大きく展開したところも存在しています。まとめてみれば、体験的な部分、仏七、禅七などと言われるものと、学問的な部分、それから社会的な部分の、三つがバランスよく提供されている気がいたします。

実は、現在の大陸におきましても、台湾の仏教の影響が少しずつ見られるようになってきました。特に佛光山の社会活動の側面は、中国政府によっても支持されるようになりまして、今は何と共産党が仏寺に積極的に関与するようになりました。寺院の中に基金会等を作り、その役員に共産党の幹部が入るという事態が生じています。お寺にたくさん集まってくる資金を、社会活動に積極的に回す方向で基金会が利用されています。山東省の煙台にあります合盧寺という、実は今年の秋口に日中仏学会議が予定されているところなのですけれど、昨年の七月に予備会議がありまして行きましたら、何と煙台の共産党の幹部の人たちが迎えてくれまして、ちょっとびっくりしました。「お寺の行事なのに、なぜ、共産党の幹部が出てくるの」と思いましたが、お寺にかなり積極的に関与していることがわかりました。かつ、大陸政府は現在の台湾に対する政治的な思惑もあって、佛光山の活動等を積極的に大陸の方に紹介しようとしています。

もう一つ、注目できるものはチベット仏教です。チベット仏教の人たちというのは、ダライ・ラマ政権が、中国共産党政権によって亡命させられてからは、あまりよいニュースを聞かないような気がしますけれども、中国の四川省から清海省にかけて、たくさんの仏教者の方たちがいらっしゃいます。チベット人の人たちの一番大きい佛学院なのですが、ラルンガル五明佛学院というのがありまして、何と、出家者だけで一万人です。それで一つの町を作っています。ところが「五千人に減らしなさい」と言われて、建物も強制的に壊されたという話を聞きました。今ちょうど、嵐の最中だそうです。チベットの人たちも、今、仏教徒が少なくなっているというのに危機感を抱いていまして、そこで今、出てきたスローガンが「シッダールタ・インテント」です。これは、「何を目指してシッダールタは出家を

したのか、その原点に帰ろう」という試みです。生老病死の苦しみを超えようとして出家したのではなかったか、私たちの悩み、苦しみを超えるために出家をしたのではなかったのか、そこから仏教をもう一度考え直そうという運動が、起きています。

最後に、戦後の日本の仏教の特色ですけれども、戦争に対する反省等がなされ、みずから自律的に、かつ、連合を作って活動することが始まりました。でも、実際には、いろんな宗派の運動を見ましても、かなり宗派ごとの運動になっています。天台宗の「一隅を照らす運動」とか、浄土宗の「おてつぎ運動」とか、いろいろなものがありますが、祖師に規範を求めるという方向性が、今も強く出ているような気がします。それから、近世の寺請制度というのが現在も続いていますが、この恩恵が今、先細りしつつあります。この中で、新しいものをやはり考えていかなければいけない時期にあると思います。弊害みたいなものも確かにあるのではないかと思いますので。

現在、注目されるものは、東南アジアの仏教が一九八〇年代後半から紹介されるようになったことです。それも、東南アジアの文化的なものは落としてしまって、修行、「サマタ」と「ヴィパッサナー」という名前で呼ばれるのですが、天台の「止」と「観」と同じものですが、こころの観察方法が、一九八〇年代ぐらいから日本に紹介されるようになりました。言ってみれば、修行のみが取り出されて紹介されているということでしょう。今は、マインドフルネスという名称で、同じものが登場してきています。

東日本大震災を契機にして、仏教界に対する眼差しは、かなり注目されているものがあるように思います。再び、人々の心にどのように寄り添うのか、何を目指しているのかが問われる事態になっているのではないかと思います。ご清聴ありがとうございました。（本発表の一部は科学研究費・基盤研究（B）課題番号一五H〇三一六五の研究成果の一部に基づいています。）

司会　蓑輪先生、どうもありがとうございました。それでは、五分程、休憩して、ディスカッションに移りたいと思いますので、休憩とさせていただきます。

アジア世界からみた戦後の仏教の特色と未来

―仏身論を考える手がかりに―

東京大学大学院教授
日蓮宗現代宗教研究所顧問
蓑輪顕量

①

目次

- 仏陀論　仏身論と教主論
- 中国天台智顗の三身説
- 日本天台の仏身論
- 中世の仏身論
- アジア世界・現代台湾仏教
- 戦後の仏教の特色

②

仏陀論　仏身論と教主論

- 中国・日本天台における典型的な理解
- 中国天台にみる三身説
- 法・応・化身の三身説
- 三身一体説（三身説の展開）
- 法身、報身、化身のブッダは実は一体なるもの

- 密教にみる四身説　自性身・受用身・変化身・等流身
- 空海の法身説法説の展開になる新義真言宗の「加持身説法」説

③

<三身一体>説

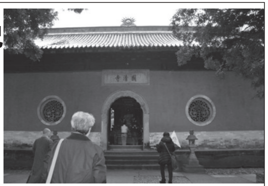
・『入楞伽経』巻第八、化品十五「大慧。應化佛者無業無謗、而應化佛不異法佛報佛如來而亦不一」(大正16,560c29-a1)

- ・『不空羂索神變眞言經』巻第二十八、清浄蓮華明王品第六十七
- 「常觀九十九億倶胝那庾多百千諸佛如來。是諸佛等、爲現種種佛刹一切如來三身一體、皆等毘盧遮那佛身相好、得宿住智、能知過去百千大劫所受生死。一切如來神通威徳灌頂眞言印三摩地門盡皆現。」（大正20, 383c11-15）

- 四明知礼述『金光明經文句記』
- 「無太功徳爲瘦、有無善上起見思如瘡癬。不見三身一體之佛、不聞圓頓之法、不入三賢十聖衆數。」（大正39, 98a18-20）

④

中国・天台智顗の三身説



- 別教の場合、三身各別
- 法・報・応はそれぞれの性質を持つ

- 円教の場合　三身円融
- 中心は報身に 「通明三身、正在報身」（寿量品の久成の仏を、三世に渉って衆生を救済するところの智慧を有する点、衆生の修行と成仏の手本としての因行果徳の仏身である点に注目）。
- 法身の理に合致するので、報身でも常住なのだと見た。

⑤

日本天台の仏身論

- 三身一体説
- 法身・報身・化身の一体説
- 円珍『授決集』三身仏決
- 「不空羂索神變眞言經第二十八云、一切如來三身一體、皆等毘盧遮那法身相好已上。經文既云三身一體皆等遮那相好。何可用三身各別之言。」(大正74,308b19-22)

- (参考：真言宗密教の説　自性身・受用身・変化身・等流身）

⑥

中世の円爾弁円(1202-80)が伝える華厳・天台の仏身説

- 『十宗要道記』「華厳同天台宗」
- 今此宗不經三祇滿薩埵行、不踰一念證舍那果、簡色相莊嚴佛、修習一心三觀、解多卽身成佛理、證得一體三身佛也。

- 可知、全初不感得有相無相等一切果報、唯衆生心、從本以來、不生不滅、不移四相、不垢不淨、不穢四生、本覺圓滿、一體三體、本寂本明、三身一體、法身如來。今顯此理、歸本覺佛、身土不二、居寂光土也。但何名三身一體如來者、以衆生心性、名法報應也。

⑦

日蓮聖人の仏身論

- 『観心本尊抄』「無始の古仏」
- ・『如来滅後五五百歳始観心本尊抄』
- 「壽量品云、然我實成佛已來無量無邊百千萬億那由佗劫等<云云>。我等己心釋尊、五百塵點乃至所顯三身、無始古佛也。經云、我本行菩薩道。所成壽命今猶未盡。況復倍倍上數等<云云>」（大正84, 275a23-26）

- ・『聖愚問答鈔』上「深谷に開敷せる花も中道実相の色を顕し、広野に綻ぶる梅も界如三千の薫を添ふ。言語道断心行所滅せり。可謂商山の四皓の所居とも、又不知、古仏経行の迹歟。」(昭和底本,358:1-3)

⑧

「本仏」の用例は稀？

- 『四菩薩造立鈔』
- 「今、末法に入れば尤も仏の金言の如きんば、造るべき時なれば、本仏本脇士造り奉るべき時也。当時は其時に相当れば、地涌の菩薩やがて出させ給はんずらん。」

⑨

古仏との用語は、『華厳経』や真言系の『大日経』に現れる

- **『華厳経』**
- 大方廣佛華嚴經』(六十巻本）
- 「無上王佛。希有身佛。梵供養佛。不瞬佛。<u>順先古佛</u>。最上業佛。順法智佛。無勝天佛。不思議功德光佛。隨法行佛。無量賢佛。普隨順自在佛。最尊天佛。如是乃至樓至如來、在賢劫中、於此三千大千世界、當成佛者、悉爲其母。」(大正10,417a4-8)
- **『大日経』**
- 『大日経』第三「世間成就品第五」
- 無垢妙淨清　圓鏡常現前　<u>如是眞實心　古佛所宣説</u>
- 照了心明達　諸色皆發光　眞言者當見　正覺兩足尊
- 若見成悉地　第一常恒體　從此次思惟」　(大正18,22a16-21)

⑩

当時の真言宗では

- 覚鑁・道範・頼瑜（のちに宥快・杲宝など古義派に）、有名人が登場
- 頼瑜（新義）は、自性身に本地身と加持身があり、加持身が説法するという新しい加持身説法説を主張する
- (従来は、自性身のみが本地身で、他の三つが加持身）
- 日蓮聖人は、頼瑜の存在は知っているが、加持身説法説には言及していない？

⑪

日本の中世以降の仏身論の展開は様々だが・・・

- 大きく、二つに分かれる
- 三身一体説
- 自性身・受用身・変化身・等流身の四身説

⑫

三身一体説の影響は

- 化身である釈尊も、法身である釈尊も、色形をもって表現できる
- (法身は本来、法そのものであり、真理,真如と同じであるとすれば、
- 形を持って表現することはできない。）

- 日蓮聖人の三身一体説
- →報身・化身の釈尊も無始無終になる

⑬

『一代五時図』に見る三身説

- 華厳ルサナ真言ノ大日等ハ皆此仏ノ為眷属。
- 久遠実成実修実証ノ仏
- **天台宗御本尊**
- 釈迦如来

⑭

日蓮聖人の見る三身

	応身	有始有終
始成三身	報身	有始無終
	法身	無始無終（真言ノ大日等法）
	応身	無始無終
久成三身	報身	無始無終
	法身	無始無終

⑮

アジア世界に見る三身説　台湾の仏教

- 現代台湾を代表する五つの本山
- 仏光山（星雲法師）
- 法鼓山（故・聖厳法師）
- 中台禅寺（故・惟覚禅師）
- 霊鷲山（心道法師）
- 慈済功徳会（証厳法師）

- 仏光山仏陀紀念館

⑯

現代台湾仏教の背景

- 人生仏教・人間仏教
- 中国清朝の末　改革者　太虚（1889-1947）
- スローガン　人生仏教
- 「鬼神（人間の霊魂など）に仕える仏教
- ではなく、人間を生かす仏教でなければ
- ならない。」
- 印順法師にも大きな影響

⑰

印順の思想背景

- 阿含経典からその発想を得る
- ブッダは肉身を持ち、人々の間で教えを説いた
- (化身を大切にする　法身・報身は教学として受容、ガヤに悟りを開いた仏の背後に、法身をみることはあり)

⑱

印順法師（1906-2005）の人間仏教の思想

- 太鼓の人生仏教を継承して　人間仏教を主張
- 「人々の間で活躍する仏教でなければならない」
- 因順の影響下に、
- 星雲(仏光山)　聖厳(法鼓山）
- 証厳(慈済功徳会)
- などの諸法師が輩出された

⑲

印順の思想の特徴

- 現代社会においては理性や知識が重要であるとの認識のもとに、仏教の理智の部分を重視したと言われる。また
- ①原始仏教の純粋さ、
- ②大乗仏教初期の実践と思想、
- ③大乗仏教後期の唯識と如来蔵
- などを、後代の仏教において有意義になるものと考えていた。

⑳

- 1989年『契理契機之人間仏教』（『華雨集』第四冊に収録）。
-
- 在國難教難嚴重時刻，讀到了『增壹阿含經』所說：「諸佛皆出人間，終不在天上成佛也」。回想到普陀山閱藏時，讀到『阿含經』與各部廣『律』，有現實人間的親切感、真實感，而不是部分大乘經那樣，表現於信仰與理想之中，而深信佛法是「佛在人間」，「以人類為本」的佛法。（印順[1989]: 3）
- 「仏たちは人々の間に出て、決して天上において仏となったのではない」との記述が重視され、「仏は人々の間に在る」ことと「人類をもって本とする」ことという二つの人間仏教の理論が、『阿含経』から導かれたものであった。

㉑

1983年に『雑阿含経論会編』三巻

- 『雜阿含經』（即『相應阿含』，『相應部』），是佛教界早期結集的聖典，代表了釋尊在世時期的佛法實態。佛法是簡要的，平實中正的，以修行為主，依世間而覺悟世間，實現出世的理想—涅槃。在流傳世間的佛教聖典中，這是教法的根源，後來的部派分化，甚至大乘「中觀」與「瑜伽」的深義，都可以從本經而發見其淵源。這應該是每一位修學佛法者所應該閱讀探究的聖典。
- 『雑阿含経』は、釈尊の在世中の仏法の形態を伝えており、仏法が簡略にしかも偏ることなく説かれ、修行を中心とし、世間によって世間を覚り、出世間の理想である涅槃を実現していると考えた。しかも、これが仏法の根源であり、大乗の中観や瑜伽の深い意味も、すべてこの『雑阿含経』から流れ出たものであり、『雑阿含』の中に淵源があると位置づけた。このように印順は『雑阿含経』を重視したが、その姿勢は、彼の人間仏教の理論の中にも表出していた。

㉒

「人間仏教要略」

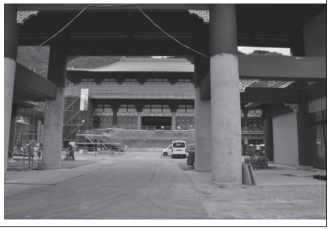
- 2001年刊行の『人間仏教論集』に収載された「人間仏教要略」に記された主張
- 原則
- 「法与律合一（法と律との合一）」
- 「縁起与空統一（縁起と空との統一）」
- 「自利与利他合一（自利と利他との合一）」
- を大切にすることを説く

㉓

仏光山

- 現在、欧米、アジア、日本にも拠点を持つ（日本の拠点は山梨県身延町本栖湖湖畔の本栖寺・東京池袋の東京仏光山寺・群馬県伊香保温泉の法水寺など）
- 現在の仏光山はお参りにくる参詣者に（昼食時には）無料で食事を施している。
- 東京別院

伊香保・仏光山法水寺



㉔

人間仏教のスローガン

- 文化による仏法の弘揚
- 教育による人材の育成
- 慈善による社会への奉仕
- 共修による人心の浄化

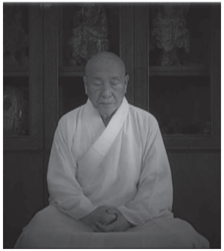
㉕

法鼓山（金山郷） 台北の農禅寺も拠点

- 聖厳法師　台湾僧侶で始めて日本の大学（立正大学）で学位取得
- 人間仏教の中でも学術に関心　→仏典の電子Database（CBETA)

㉖

中台禅寺　惟覚和尚（1928-2016）



中国四川省の出身。蒋介石とともに台湾に来台。臨済宗、曹洞宗の法脈を継承すると言われる。

禅を中心に教線を拡大（1990年代に大量の大学生を出家させ社会的に批判されるが、巨大な寺院を台湾中央部の甫里に築く）。天台の中道実相観や発語の最初の部分を観察するという、清朝以来の「話頭禅」を弘める。

㉗

中台禅寺

- 惟覺禅師（瞑想に秀でるとの評判）
- 法・報・化の三身説を受容
- 化身の釈尊　報身の釈尊　法身の釈尊

㉘

現代でも三身を一体とみて、それを図像に表すものが存在

- 化身の背後に報身や法身をみる伝統
- ＝三身一体説・三身円融相即説
- この考え方から見ていけば、
- 本仏は、あくまでも三身を統合した「もともとの」仏の意味であったのでは。

㉙

三身一体

- 翻って、日蓮聖人に戻れば、化身も報身も、寿量品の「久遠に実成した」の記述に基づいて「無始無終」と見たのであり、それがもともとの仏であり、古仏とも表現されたのだと推定される。

㉚

未来へ向けて

- 東アジア世界の中国、台湾、（韓国も）では、過去仏・現在仏・未来仏という考えが踏襲されており、本殿に三体の仏が並べられることが多い。
- また、この釈尊の化身（肉身）の背後に、報身や法身を見るという伝統も、存在している。
- 言説の上では、三身が成立したが故に、その融合を説くということが起きたが、重ねて見る、すなわち複合的に見ることができるのが、人間のもつ思考の働きの面白いところ、と言える。

㉛

なお、人間仏教に関しては

- 日本仏教には、もともとそのような意識がかなり濃厚だったのでは
- 戦国時代　権門の一つであったはずの寺社家が、武家の支配下に入った時代　近世　武家の支配下に存続する
- 　仏教界は　社会にとって有用な何かを提供するものとして位置づけられる
- 　　・民衆の自律精神　←戒律の復興
- 　近代　仏教界は始めて政治と切り離される→自ら社会にとって有用であることを示そう→政治の要求と合致する運動に

㉜

戦後の仏教の特色

- 戦争に対する反省
- 自ら自律的にかつ連合を造って活動することを目指す
- しかし、実際には宗派毎に活動を続けることになり、また改革の方針も、祖師に、軌範を求める方向に動く
- 近世寺請制度の恩恵の先細り　弊害は？
- 東南アジアの仏教が1980年代後半から紹介されるように
- （東南アジア及び台湾など）　修行のみが取り出されて紹介される
- 東日本大震災やマインドフルネスの登場を契機に・・・
- 再び、人々の心にどのように寄り添うのか、何を目指しているのかが問われる

㉝

ご静聴、有り難うございました

終了

㉞